

【翻訳】

バイロン「ヘブライのうた」(*Hebrew Melodies*, 1815)

バイロン作 (ジェローム・J・マガン編注『バイロン詩作品全集』より)

Byron, Hebrew Melodies

藤井仁奈

FUJII, Nina

キーワード：バイロン ヘブライのうた マガン編『全詩集』 1816年マレー版 旧約聖書

そのひとは歩み美しさをまとう

一

これら一連の詩は、我が友D・キナードの要望に応じて、「ヘブライのうた選集」のために書かれた。それらは、ブラハム氏とネイサン氏の両名によって編曲された音楽を付して出版された。(一八一五年マレー版序文に付された原注より。)

そのひとは歩み美しさをまとう、
雲なき土地や星瞬く空の、夜のように。

そして、闇と耀きの極みのすべては

あの輪郭とあの瞳で交わる。

そして、天が、照りつける昼の光には許さない、

豊潤な優しい光となって溶けてゆく。

二

影がひとつ増えても、光のすじがひとつ減っても、
なかば弱められてしまうのが、えもいわれぬ優美さで、
影は、黒髪の一筋ひとすじに波打ち、
光は、やわらかにあのひとの顔を照らしている。
天上の素晴らしい思想は、その在処の純粹な貴やかさを、
その顔に、あらわしている。

三

そして、やわらかで、おちついていて、それでいて表情の豊かな、
あの頬には、あの眉には、
魅力的なほほえみが、艶やかな赤みが、
善良に過ごしてきた日々を語り、
かしづくものとともに平穩に過ごす心意気と、
けがれない愛のある心根を語るのさ！

(1814)

王なる伶人が豎琴をかき鳴らしたぞ

一

王なる伶人が豎琴をかき鳴らしたぞ、
私たちの王、天に愛された者だ、
その樂の音が聖なるものとした豎琴なのだ、
真心がふるえ、涙があふれ、弦は裂けんばかりに、
その豎琴は嘆いていた。
その樂の音は、鉄の鑄型でできた男たちをなだめ、
私たちの持たぬ貞潔を与えた。
ダビデの豎琴が、その玉座よりも力強く鳴り響く
までには、
鈍った耳も、つめたい心もなくなり、
その音色に、心は感じやすく、燃え立つたのだ。

二

その豎琴は、われらの王の勝利を告げ、
われらの神の栄光を示した。
その豎琴は、歡喜する谷に鳴り響き、
杉の樹々をかしげずかせ、山をうなずかせた。

その音は天へと立ち上り、天にとどまった！

それ以来、もはや地上では聞かれなくなってしまったものの、

〈献身〉とその娘の〈愛〉は、

なおも命じなのだ、炸裂する魂に、舞い上がるようにと、

夢のなかで、天空より漏れ来ては、

拡がる昼の光が拭えぬような、音色に向かって昇るようにと。

(1815)

もしも高さあの世が

一

もしも、この世のかなたに在る、高さあの世が、

ながらえた〈愛〉を愛おしんでくれるのなら、

大事にされた愛情が深くなって、

涙以外、瞳のあたりも同じなら、

あの人の踏み入ったことのない蒼穹は、なんと歓を

尽くしたものでしょうね。

この臨終のときは、なんと甘美なものだろうね。

地上より舞いあがり、あらゆる恐れが、

〈永遠〉の光へと消えゆくことは。

二

そうにちがいない。自分のためではないのだ、

われらが懸崖の縁でふるえがとまらないのは、

奈落の淵を飛び越えようとあがきながら、

なおもちぎれそうな〈存在〉の環にしがみつくの

は。

ああ！ 来世では、こう考えさせてほしい、

共感する心が、それぞれの心を抱きしめ、

ともに不滅の川の水を飲みこみ、

そして心に潜む魂を、不滅のものへと育てせてく

れ。

(1814)

野の羚羊

一

ユダヤ(2)の山々に、野の羚羊
今もうれしく、跳ねまわり、
そして、聖なる大地に湧き出して
流れるせせらぎを飲むのかも。
軽い足どりに、絢爛な目、
夢見がちの気ままさで、輝くのかも。

二

ユダヤの地が見てきたものは、
おなじ軽い足どりと、さらに煌めく目。
そして、失われた喜びの光景には、
ずっと綺麗な住民がいた。
レバノン(3)には、今も杉が揺らめくけれど、
ユダヤの華麗な乙女たちはもういない！

三

イスラエルの散り散りになった種族よりは、

あの平原に影をおとす椰子はそれぞれ恵まれて
いるね。

だって、椰子は、その地で根を張り、

優雅に孤高にそのままに、

生まれた場所を離れられない、

ほかの土地に生きようとも思わない。

四

でもね、ほくらは、さまよい、衰えて、

ほかの土地で死ななくちゃならない。

そして、父祖の遺灰がどこに在ろうと、

そこには決してほくらの遺灰は埋葬されない。

ほくらの神殿には石ひとつ残ってはいない、

エルサレム(4)の玉座には(嘲り)が坐っている。

(1814)

ああ、人々のために涙せよ

一

ああ！ バビロン（5）の流れのほとりて涙する（6）
人々のために、涙せよ。

彼らの社は荒れ果て、彼らの土地はゆめまぼろし。

壊されたユダヤの豎琴のために涙せよ。

嘆け——彼らの神の御座には、無神の者どもが棲んで
いる！

二

どこで、イスラエルは、血の流れるその足を洗うの
だろう？

いつ、シオン（7）の歌は、ふたたび甘く聞こえるの
だろう？

ユダヤの調べは、今一度、天の御声の御前へと
飛翔してゆく人々の心を喜ばせるのだろうか？

三

さすらう足と疲れた胸を持つ人々よ、

おまえたちは、どのように逃げ惑い、安らぎを得る

の？

野の鳩には巣がある、狐には罠がある、

人間には郷がある——イスラエルの人々には墓し
かない！
(1814)

ヨルダン川の岸辺では

一

ヨルダン川（8）の岸辺では、アラブの人々の駱駝が
さまよっている、

シオンの丘には、偽りの神の信奉者たちが祈りを捧
げる、

バール神（9）の狂信者たちが、シナイ山（10）の斜面
でひれ伏している——

しかしそこには——そこにさえ——おお、神よ！
御身の雷が眠っている。

二

そこは——御指が石碑を焦がしたところ！

そこは——御影があなたの民に向かって輝いたと

ころ！

御栄光が炎の衣に包まれたのだ。

御自身は——生者には目に見えず、御自身は息をひきとることはない！

三

おお！ 稲光のなかに、まなざしを見せたまえ！

暴君の手からその武器を掠めてくれ。

あとののくらしい、独裁者にあなたの地を踏みにしらせるのか？

あとののくらしい、おお、神よ、あなたの神殿を、崇められぬままに？

(1814)

エフタの娘(II)

一

我らの祖国が、我らの神が、——ああ、お父様！
あなたの娘に死ぬよう命じているのですから、

あなたの誓いによって勝利が贖われたのですから、

あなたのためにあらわになった胸を突いてくださ
い！

二

あなたの嘆く声も聞こえなくなり、

もはや山々も私を見つめてはおりません。

私の愛するその手が、私を深みに横たわらせるのな
ら、

そのひと突きが痛いはずはありません。

三

ああ、お父様！ きっとこう思ってください、
あなたの子どもの血は、流れる前に私が願った祝福
と、

私をなだめる最期の思いと
同じくらいに澄んでいると。

四

エルサレムの乙女たちは嘆くけれども、
士師たちと英雄たちは屈してはいけません！
あなたのために、私は大いなる戦いに勝利しました、
そして、我が父と祖国が自由になったのです！

五

あなたの生んだこの血がほとばしるとき、
あなたの愛する声が途絶えるとき、
私の思い出は、なおも、あなたの誇りでありますよ
うに、
そして私の死の瞬間の微笑みを、わすれないでくだ
さいね。

(1814)

おお！ 花のさかりに死んだひとよ

おお！ 花のさかりに死んだひとよ、

重たい墓石をおまえの上へのせたりはしないよ、

おまえの塚には、その年最初に咲く

薔薇の枝を這わせよう、

野の糸杉には、優しい薄闇のなかで、揺すらせよう。

二

そして、向こうの青い奔流のそばで、

〈かなしみ〉は頂垂れ、

さまざまの夢には、深い想念を焼べてやり、

軽い足どりで、あてもなくさまようかもしれない、

あわれな愚か者！ まるでその歩みが死人を悩ま

せるかのように。

三

もういいよ。涙は儚く、死人は、嘆きになんて気にも

留めず、

耳も貸さないと、わかっているよ。

だから、我々に嘆くなって言うの？

悼む者に、泣くなって言うの？

そしておまえ——私に忘れろと告げるひとよ、

おまえ、顔は蒼褪め、目は濡れているよ。

(1815)

我が心は暗い

一

我が心は暗い—— ああ！ はやく琴に弦を張れ、
今ならまだ耳を傾けられるから。

我が耳へととるけるささやきを、

おまえのやさしい指先で、奏でさせてやってくれ。

この胸に、愛しい希望があるのなら、

その音が、希望に、また出て来るよう、誘うはず。

この目に、涙が潜んでいるのなら、

その涙は流れ出て、脳裏を焼くのをやめてくれる

はず。

二

だが、音色は荒々しく深いものにしてくれ、

はじめに、喜びの調べがないように。

詩人よ、言っておくが、私は泣かなくてはならない、

そうでないで、この重たい心が裂けてしまう。

というのも、この心は悲しみによって養われ、

眠れぬ静寂のうちに、永く、うずいてきたのだから。

ら。

そして今や、最悪を知るよう、間もなく張り裂ける

よう、

仕向けられている——歌に心をゆだねなければ

な。

(1814)

わたしはおまえが泣くのを見たよ

一

わたしはおまえが泣くのを見たよ——

青い目から、光る大きな涙の粒が、落ちてくるの

を。

そうして、思ったんだ、

それはすみれの花から落ちる雪のようだなあ

て。

わたしはおまえの微笑みを見たよ——おまえのそばでは、

サファイアの眩く青い炎は、耀きを鈍らせる。

おまえのまなざしを満たしている

生きている光にかなうはずもなかったんだ。

二

やがて来る暮れがたの影が

空から色彩を追いやるなんてできっこないのだ、

そのやわらかで深い色彩を

はるかな太陽から受け取る雲のように、

ひどくふさぎこんだ精神に、おまえの微笑みは

澄んだ喜びを与えてくれる。

微笑みの陽射しは、そのあとに、

心を照らす光を残してゆくんだよ。

(1814)

おまえの生が終わり

一

おまえの生が終わり、おまえの名声は高まる。

おまえの郷の里謡が記憶するのは、

郷の選ばれし息子の勝利、

その剣の殺戮、

その武勲、その勝利の戦いの数々、

その取り戻した自由！

二

おまえが倒れても、俺たちが自由であるかぎり、

おまえに死を味わせたりはしない！

おまえが流した鮮血は、

大地に染みこむのを恥だと思った。

おまえの血の流れは、俺たちの血脈に在り、

おまえの気迫が、俺たちの氣息に在るように！

三

おまえの名は、突撃する俺たちの軍勢の間で、

合言葉としよう！

おまえの斃死は、少女たちの合唱の、
歌の主題としよう！

泣哭はおまえの榮譽にはふさわしくない。

おまえは嘆かれてはならない！

(1814)

いまがそのとき

いまがそのとき

大きな枝から、夜啼き鳥の高い声がきこえてくる。

いまがそのとき

恋人たちのささやく誓いが、甘美なものに思えてくる。

優しい風と、近くの流れが、

孤独な耳に、音楽となる。

花の一輪一輪が、露でふんわり湿っている。

空では、星が出会ったところ。

青色が浪間で深くなる。

深緋が葉裏で深くなる。

澄んだ暗闇の覆う天では、

あんまりに黒が優しくて純なので、

陽の傾きはやがて続くよ、

月の下、黄昏が溶けあうときに。

(1814?)

最後の戦いのまえの、サウル王(12)の歌

一

戦士たちよ、頭領たちよ！ 矢であれ、剣であれ、
主の御軍を率いている俺を、刺し貫くことがあれば
たとえ王の屍骸であっても、進む道の屍骸には気を
留めるな！

おまえたちの刃を、ガト(13)の人間の胸にうずめろ！

二

俺の盾と弓を持つおまえは、

サウルの兵士たるもの、敵から目をそらすのなら、

おまえの足元に、俺を血にそめて、斃すのだ！

連中が敢えて避ける運命こそ、俺の運命だ。

三

ほかの連中には別れを告げもするが、俺たちは離れないぞ、

わが王権の後継者よ、わが心の息子よ！

その王冠は輝かしく、その支配は無限の領域だ。

そうでなければ、今日までわれらを待っているのは、

王にふさわしい死だ！

(1815)

サウル王

一

死者をよみがえらせる呪文を持つ者よ、

預言者サムエル⁽¹⁴⁾の姿を現せよ。

「サムエル、おまえの埋葬された頭をあげろ！

サウル王よ、預言者の亡霊を見よ！」

大地は大きく口をあけ、煙の中にサムエルが立つて

いた。

光はその色合いを変化させ、死体を包む白布から身を引いた。

死者は、生気のない眼差しを、じつとこちらに向けていた。

その手は萎え、その静脈は干乾びていた。

その足は骨となり、白くぎらつき、

しなびて、筋肉もなく、青褪めて、剥き出しだった。

動かず、息もせず、ただ骨組みとなった唇から、

洞窟を流れる風のような、うつろな声が漏れてきた。

サウル王はそれを見て、檜の木が倒れるように、地に倒れた、

ただちに、雷の一撃をくらったように。

二

なぜ我が眠りをかき乱すのだ？

死者を呼び出すのは何奴だ？

おや、おまえか、サウル王よ。見よ、

我が手足は血の気も失せ、冷え切っておる。

そうして、おまえの手足もこうなるのだぞ、

明日、我とともに。

明日の日暮れには、

おまえも、おまえの息子も、こうなるのだ。

さらばだ、だが、一日の間だけな。

そうすれば、我々はともにほろほろの土塊、混じり合うのだ。

おまえも、おまえの一族も、青褪めて土の中に横たわるのだ、

あまたの矢に射抜かれて。

おまえは、そばの刀をその手につかみ、

おのれの心臓を貫くだろう。

冠もかぶらず、吐息もなく、斬首されて滅びるのだ、
親子ともども、サウル王の一家は！

(1815)

「すべては空しい、とコヘレト(15)は言う」

一
名誉、知恵、愛、そして権力は、私のものだった、

そして、健康と若さも、私にはあった。

私の杯はあらゆる葡萄酒の酒で赤く煌めき、

そして、美しい体が私を抱きしめてくれた。

私は美しいひとの目に、自分の心をひたし、

そして、じぶんの気持ちりがだんだん優しくなって

いくのがわかった。

大地の与えてくれるものすべては、あるいはこの世の素晴らしいものすべては、

壮麗な輝きをともなう、私のものだった。

二

私は数えようとおもう、思い出せるかぎり、

どんな日々が、過ぎていったか、

人生や地上の映し出すすべてが

私をもう一度繰り返すよう誘惑する日々が。

快樂の日は苦いままに夜明けを迎え、

快樂の時間は苦いままに過ぎ去っていく。

権力を飾りたてる衣装はどれも、

さらびやかだが、苛立たせる。

三

野の蛇は、作為と呪いによって、
害を与える能力を剥奪された。

しかし、心の周りにとぐるを巻く蛇を、

おお！ 誰がとらえる力を持っているというの
か？

蛇は知恵の教えに耳など傾けず、

音楽の音が蛇を惹きつけることもない。

蛇はそこで永遠に魂を咬みつづけ、

魂はそれに耐えなくてはならない。

(1815)

冷たさが苦悩する肉体を包むとき

一

冷たさが、苦悩する肉体を包むとき、

ああ、不滅の霊はどこへと向かうの？

滅びず、とどまれず、

うしろに黒ずんだ灰燼を残して。

形もなく、一歩ずつ、

天へと向かう、惑星の道をたどってゆくのか？

それとも、たちまち、宇宙を満たして、

すべてを見透かす目というものになるのか？

二

永遠に、とられられず、朽ちることもなく、

目に見えない思想は、すべてを、

地上のすべてを、空の映し出すすべてを見透かし、

見渡し、思い起こすことだろう。

記憶が漠然ととどめている、

過ぎし歳月のかすれゆく痕跡を、

魂はひと目で見てとり、

そして、存在したすべてが、たちまちに現れる。

三

《創世》の業が、地上に人を住ませる前にまで、
魂の目は、混沌を抜けて、遡つてゆくだろう。

そして、極みの天が生まれたところに、

その靈魂は昇る軌跡をたどるだろう。

そして、未来が毀し、あるいは造るところで、

その目は、在るものすべてのうえに広がり、

太陽が消え、宇宙のつながりが壊れるとき、

自らの永遠の内側にとどまるだろう。

四

《愛》や、《希望》や、《憎しみ》、《恐れ》を超えて、

魂は、情熱もなく、純粹なまま、生きる。

地上の一年のように、ひとつの時代が過ぎ去るだろ

う。

瞬間の続くように、地上の一年が続いてゆくだろ

う。

遠く、遠く、翼もなく、

すべてをこえて、すべてを抜けて、その思想は飛

んでゆくだろう。

名もなき永遠のものよ、

死ぬことは何だったかを、忘れながら。

(1815)

ベルシャツアル(16)の幻視

一

王は玉座に在り、

領主たちは広間に集った。

幾千の煌めく明かりが

宴席の上高く輝いた。

幾千の黄金の杯は

ユダヤの地では聖なるものに見えた。

神ヤハウエの祭具は

神を認めぬ異教徒の酒で満たされていた！

二

その同じとき、同じ場所で、

人の手の指が現れて、

まるで砂のうえに書くように、
壁に文字を書いたのだ。

人の手の指――

手だけが

もの書く手先は進み、

魔術の杖のように文字を書いた。

三

それを見た王は、恐怖にかられ、

もはや喜びの気も失せた。

顔は蒼白となって、

声は震えた。

「知者たちを集めよ、

この世で最も賢い者を呼べ、

恐ろしい文字の意味を説明せよ、

王の宴を台無しにしたこの文字を。」

四

カルデア（17）の星占い師たちは良いひとたちでも、

ここでは齒が立たなかつた。

謎の文字は

解読もされず、不気味にじつと動かなかつた。

当時のバビロンの人々は

賢くもあり博識でもある。

けれど、このときばかりは、賢いとも言えず、

字を見ても、なにもわからなかつた。

五

その地の捕囚、

若い異邦人（18）、

その者は王の命令を聞き、

文字の真相を読み取つた。

周囲の明かりは燃え立ち、

予言ははつきり見て取れた。

あの夜、その者は、その文字を読んだ――

夜が明けて、それが真実と証明された。

六

「ベルシャツアル王の墓は造られ、

その王国は滅びてしまった。

彼は秤にかけられて、

軽く、足りない土塊とみられている。

王の死体を包む布、王の衣、

王の天蓋、王の石！

隣国メデリア⁽¹⁹⁾の人々が、王の門に集うのだ！

隣国ペルシア⁽²⁰⁾の人々が、王の玉座にのぼる

のだ！」

(1815)

眠れぬ者の太陽よ！

眠れぬ者の太陽よ！ 憂鬱な星よ！

その潤んだ光の筋は、遠くへと震えながら差し込み、

おまえが拭えぬ闇を示している。

どうしても忘れられない喜びに、おまえはなんて似

てるんだろう！

過去は、あの日々の光は、強く輝いているね、

輝いてはいるけれど、力のない光の筋で、温まらな

い。

〈悲しみ〉は、夜の光を、眠らずに見つめている。

くつきりして、でも、遠くて、——澄んでいて——
でも、ああ、なんて冷たいんだろう！

(1815)

我が胸が、おまえが思うほどに不実ならば

—

我が胸が、おまえが思うほどに不実ならば、

ガリラヤ⁽²¹⁾の地から遠く離れて、さまよわなくて

いいのに。

奴らの言う、我が種族の罪という呪いを消し去るこ

とは、

我が信条を破ることにすぎなかった。

二

もしも、悪い人々には勝ちがめぐらないのなら、神

はおまえとともに在る！

もしも、奴隷しか罪を犯さないのなら、おまえは穢

れなく、自由だ！

もしも、地上のさすらいびとが、天から追放された者なら、

おまえは自分の信念に生きろ、私は自分の信念に死ぬつもりだ。

三

おまえがくれた以上の信念を求め、私は迷ってしまったのだ、

おまえに繁栄を約束した神が御存知のように。

私の心と望みは、神の手中にあり、

神ゆえに私が手放した土地と命は、おまえの手中にあるのだ。

(1815)

マリyamネ(22)を悼むへロデ(23)の嘆き

一

おお、マリyamネ！おまえを血まみれにした

その心が、今や血を流している。

復讐は苦しみにまぎれ、

憤怒のあとには、自分を責める激しい後悔。

おお、マリyamネ！おまえはどこだ？

おまえには、私の苦い願いは聞こえない。

ああ、おまえに聞こえたら——今は許してくれるだろうね、

私の祈りを天が無視しようとも。

二

それで、あいつは死んだのか？——嫉妬に狂った私の怒号に、

奴らは敢えて従ったのか？

私の怒りは、自分に絶望を運命づけただけだった。

あいつを殺した刃が、私の上で揺れている。

ああ、おまえは冷たくなっているね、私に殺された恋人よ！

それで、ひとり空へと舞い上がっていくあいつを、救いには値しない私の魂を置き去りにしたあいつ

を、

この暗い心は、むなしくも、強く望んでいる。

三

あいつは逝った、我が玉座を分かち合った者は。
あいつは没した、我が喜びもろとも埋めてしまっ
た。

私はユダヤの花茎から花をもぎとってしまった、

その葉叢は、私だけのために花を咲かせていた。

罪は私のもので、地獄も私のもの、

この胸の惨めさを宣告している。

それで、私は充分こんな苦しみを味わってきた、

その尽きせぬ苦しみは、なおも燃えている！

(1815)

ローマ皇帝ティトゥス⁽²⁴⁾がエルサレムを破壊
した日に

一

かつて聖堂だったところの上にのぞむ最後の丘か
ら、
私はおまえを見つめているよ、シオンよ！　ローマ

に明け渡された日に。

おまえの最後の太陽が沈んでいった、そして、私が
最後にその城壁を見ると、

おまえが崩れ落ちる炎がこちらに向かって閃いたの
だ。

二

おまえの神殿を探したよ、私の家を探したよ、

その一瞬だけ、囚われになることを忘れたよ。

おまえの神殿に掛けられた死の炎と、

無駄な仇討をして、きつく縛られた手しか見えな
かった。

三

いくつもの夕暮れ、そこから眺めた高い丘は、

燃え立つ夕日の最後の炎を映していた。

その高みに立って、その山から、じっと見つめてい
たのだ、

おまえの神殿の上に輝いた、光の筋が傾いていくの
を。

四

そして今、その日、その山の上に、私は立った。
けれど、溶けてゆくその黄昏の光を見つけることは
なかった。

おお！ そこに稲妻を閃かせ、
征服者の頭に、雷を炸裂させたまえ！

五

けれど、神ヤハウエが敢えて君臨なさる祭壇を
異教の神々に冒瀆させたりはしない。
あなたの民が散り散りになり蔑まれようと、
おお、父なる神よ！ 我らの信仰はあなたにのみ捧
げる！

(1815)

バビロン川のほとりに、我らは座って泣いた

一

私たちはバビロンの水辺に座って泣き、
殺戮の阿鼻叫喚のただなかで、
敵がエルサレムの聖なる地を
餌食にした日のことを思った。

そして惨めなエルサレムの娘たちよ！
おまえたちは、泣きながら、散り散りになっ
ていった。

二

自由に逆巻く川を、
悲しく見下ろしているときに、

人々は歌を求めたけれど、

ああ！ 異邦人とその勝利を知らしめはしな

い！

敵のために、崇高な豎琴の弦を張るまえに、

永遠に、この右手が奏えてしまいますように！

三

その豎琴は、柳の樹につるされて、

おお、エルサレムよ！ その音色は自由なものだ。

エルサレムの栄光が終わりを迎えたとき、

おまえは私にこう告げた、

私の手で、そのやわらかな調べを、

略奪者どもの声と混ぜ合わせないようにと。

(1815)

センナケリブ王⁽²⁵⁾の破滅

一

羊小屋の狼のように、アッシリア人⁽²⁶⁾が襲来した。

紫色と金色に、歩兵隊がざらざらしていた。

長槍の先は、深いガリラヤ湖⁽²⁷⁾、夜ごと青い波が

打ち寄せるときの、海のうへの星々のようだった。

二

夏の緑の青いころの、森の樹々の葉群のように、

日の入りには数多の幟立つ軍勢が見られた。

秋の風の吹くころの、森の樹々の葉群のように、

日の出には散って息絶えた軍勢が横たわった。

三

なぜなら、〈死の天使〉が、一陣の風とともに、そ

の翼を広げたからだ。

そして、通りすがりに、敵の顔にその吐息を吹きか

けたからだ。

眠る人の眼が、生気を失い冷たくなった、

そして、その心臓が、一度鼓動を打ったきり、永遠

に動かなくなったのだ！

四

横たわる軍馬の鼻孔は大きくふくらんでいるけれ

ど、

誇り高き吐息は、その鼻孔を通ることはなかった。

喘いで流れた口元の泡は、草地に白くこぼれていた、

まるで岩礁に打ちつける波の水煙のように冷たく

なつて。

五

蒼褪めた騎手は、歪められて横たわっている、
眉には朝露が光り、鎖帷子は錆びついで。
天幕は静寂を貫き、幟だけが取り残され、
槍は床に落ちたまま、喇叭は吹かれぬまま。

六

アッシュユールの街⁽²⁸⁾の窓には叫び声が響き、
パール神の神殿では神像が破壊される。
異教徒たちの力など、刀を振るわれることもなく、
主の一瞥をもつてしては、雪のように融けてしまっ
た！

(1815)

ヨブ記より

一

風が私をかすめてゆき、

不滅のもの顔が現れるのを、私は見たのだ。

私の目を除いて、あらゆる目を、深い眠りが包み、
何ものか、形はなく、しかし聖なるものが、そこに
立ち止まった。

骨にへばりつく肉が、ことごとく震えた。

冷や汗の染み込んだ髪がこわばったところ、それが口
をきいた。

二

「人は神より正しいか？」

熾天使さえ頼りになるとはお考えにならない神よりも
清いのか？

土の被造物たちよ、塵の中にむなしく住む者よ！
灯虫^{ひらひら}さえおまえたちより承らえるのに、おまえは正
しいのか？

一日しか生きられぬものよ！ 夜が訪れるまえに、
おまえは滅びるのだ、

〈英知〉の放つ光に報いず、気にもとめず、盲目の
ままー！

(1815)

解説 (29)

この書物『ヘブライのうた』は、バイロンがアイザック・ネイサンのために書いた一群の歌である。ネイサンは、バイロンが書いたユダヤの主題に関する一連の聖歌に音楽をつけたいと思っていた。この企画は、バイロンの友人ダグラス・キナードの仲介で生まれた。(ネイサンがバイロンに書き送ったが失敗に終わってから三ヶ月後の) 一八一四年九月一日、この企画を提案するために、バイロンに宛てて、キナードは書き送っている。これらの歌は、一八一四年から一八一五年に書かれたが、実際、いくつかのものは、この企画が特別に始まる前に書かれている(おそらく一つは一八一三年にさかのぼる)。また、いくつかのものは、聖なる題材を扱ってはいない。バイロンは一八一四年九月の下旬から十月上旬にかけての時期に、ネイサンのために、特別に詩を書き始めた。そして、バイロンがネイサンに送った最後の詩が、「御霊の居場所よ、輝いてあれ」で、一八一五年六月に書かれたのである。ここにひとまとまりとして活字化した詩は、

一八一五年五月二十三日頃に、『ヘブライのうた』として、マレー社によって刊行されたもので構成されている。そこには、『パリシナ』(一八一六)の冒頭の数行としてよく知られている一篇(「いまがそのとき」)を含んでいる。マレー社による一八一五年版をそのまま収録するために、これを含めておいた。しかし、(ネイサンによつて音楽を付けられるためにバイロンに書かれた詩という意味で) 適切に「ヘブライのうた」と呼ばれる詩の完全版は、マレー社による一八一五年版よりも大きく、トマス・アシユトン編注による版(一九七二)に収録されている。アシユトン版には、「フランシスカ」(『パリシナ』の十五―二十八行目の改作)、「曲を付すための詞」(「私は話さない、たどらない、おまえの名を囁きはしない」)、「希望は幸福らしい」、「水の谷間に」、「ベルシャザールへ」、そして「御霊の居場所よ、輝いてあれ」といった詩が追加されている。大きくなったこの集大成を、一八一五年、一八二七年、一八二九年にネイサンは刊行し、自身で音楽を付けて、様々な歌の改版を刊行した。ただし、「ベルシャザールへ」だけは、ネイサンによる音楽が付け

られていない。

ネイサンによる出版の経緯は入り組んでいるが、アシュトンが見事に詳しく述べている。次のように言っても差し支えないであろう。ネイサンとキナードは一八一四年後半には関係が悪化し、マレーはこれらの詩を出版するのに興味を示し、そしてネイサンは単独でこの企画を継続することにした。ネイサンはまず、一八一五年四月に音楽をつけた十二編を『ヘブライのうた選集』として出版した。一八一五年マレー版は、その次に出版された。そこには二十五の詩が含まれていたが、さらに十二の詩編や（ヘブライのうたとは言えない）「準男爵ピーター・パーカー卿の死に寄せて」という詩と同様に、一八一五年のネイサン版に収められた詩編も含まれていた。一八一五年マレー版第二刷は六月に刊行されたが、その際、マレー社による選集（一八一五）に、『ヘブライのうた』が組み込まれたのである。一八一五年のネイサン版第二部は、十一月に刊行されたが、「フランシスカ」と「ヨブ記より」を除く、一八一五年マレー版に収められた残りが含まれた。その他様々な版が、それらはどれも大して重要で

はないのだが、一八一五年から一八二七年の間に出版された。そしてそのころに、ネイサンは自身の第二の、より多くの詩を取めた『ヘブライのうた選集』（一八二七―二九年版）を出し始めた。この第二の選集は、一八一五年のネイサン版に収められた詩や「ヨブ記より」、「音楽に寄せるうた」、「希望こそがしあわせ」ということだ、「うみの谷間に」が含まれていた。さらにネイサンは、『つかの間の作品集』のなかで「御霊の居場所よ、輝いてあれ」を世に送り出したとき、もうひとつのヘブライのうたを彼の集大成に付け加えたのだ……（一八二九年のネイサン版として本書では引用した）。ネイサンはこれより以前にはこの詩を選集のなかを含めなかったが、一八一五年には別個の歌曲としてのみ、この詩を出版したのだ。『ベルシャザールへ』は一八三二年まで出版しなかったのである。一八一五年マレー版のための、印刷業者の写しは、バイロン夫人によって作成された。これらは、バイロン自身が監督し、必要な箇所については改めた。一八一五年マレー版については、校正刷りがまったく残されていないが、印刷業者の写しと最終的に印刷さ

れた文章との間の校正に、バイロンが介入したことを、書誌事項が示している。バイロンによる一連の確かな写しのうち、一八一五年のネイサン版の第一部にあたる印刷業者の写しが、ネイサンが持っていた原稿だったものにちがいない。第二部については、「フランシスカ」を除く一八一五年マレー版だったものである。一八二七―二九年のネイサン版では、バイロンによる一連の写しであるその自筆原稿から、新たな詩が印刷された。これらの事実は、写しの中から次のように選択があったことを説明している。つまり、一八一五年マレー版には全部の詩が選ばれ、一八二七―二九年のネイサン版には、最初に印刷された詩が選ばれ、一八三一年の版では「ベルシャザールへ」が選ばれたのである。一八一六年刊行の『詩集』には、「御霊の居場所よ、輝いてあれ」の複写された本文が選ばれている。それというのも、これは、バイロンが校正刷りに手を入れた唯一の版だからだ。

現在の版では、アシュトンがその労作に含めているものの、一八一五年マレー版には含まれていない作品が、バイロンの詩作の一般的な年代順の連作に置かれ

ている。アシュトン版は、あらゆる書誌事項に、自動的に含まれてきた。もし読者がアシュトン版を確認しようと思つた際は、より参照しやすいうようにというのが主な理由で、その大部分について、異なる版や原稿に対しては、アシュトン版の表記や記号を、私はそのまま使用した。

この企画がバイロンに示される以前の、一八一四年四月に、彼が「マダグレナ」という詩を書き始め、未完のまま残したのを、読者は思い起こすかもしれない。その詩はユダヤの主題を扱ってはいるものの、歌ではなく、さらに注目すべきことは、主題に対する姿勢が、後の『ヘブライのうた』に対して見られる姿勢とはかなり異なっていることである。

最後になるが、詩篇一〇七章二十三節以下のテクストを主題にした、さらにもうひとつの「うた」を、バイロンは書き始めて間もなく止めてしまった。

彼らは、海に船を出し

神の驚くべき御業に目を眩る

高波が甲板を押し流し

海に雷鳴が響くとき――

この断片は「サウル王」の自筆原稿紙の裏面に書かれているのだが、明らかに一八一五年一月にハルナビーで、書かれたものなのだ。アシュトン版一七四頁の注に掲載されている。

さらに詳しい解説には、アシュトン版を参照することが可能だ。そこには、歴史的、書誌的、批評的な注解と説明が、注釈と研究資料とともに、十分に掲載されている。以下の個別的注解には、特定の詩作品と比較できるような情報を含めてある。(現在はニユーステッドに所蔵されている)『ヘブライのうた』の、テレサ・グイッチョーリによる複写原稿について、言及してもいいだろう。グイッチョーリによる詩作品の複写は、一八一五年マレー版からなされており、原稿からなされているわけではない。そして、それらは逐語的に妥当性を欠いている。

序文

ジョン・ブラハム(一七七四―一八五六)、作曲家、

歌手。

そのひとは歩み美しさをまとう

原稿及び出版経緯について。一八一四年六月の日付のあるバイロンの草稿(原稿W、所蔵先不明、個人蔵。複写原稿については、ピーター・クロフト(一九七三)『イギリスの言語における自筆原稿の詩』第二巻一〇三―四頁参照)がある。また、「ランズダウン・ハウスでウイلمット夫人に出会ったあとでバイロン卿によって書かれた数行」という見出しのつけられた、オーガスタ・リーの複写原稿(原稿AL、大英図書館蔵。オーガスタの備忘録に収められている)がある。この備忘録に収められている他の複写原稿のいくつかの本文に加え、その題名は早い段階での刊行物から写し取られたというよりも、むしろオーガスタは原稿からその詩を写したのかもしれないということを示している。一八一五年ネイサン版を皮切りに、一八一五年マレー版、その後の出版物に収録された。ジェイムズ・ウエダバーン・ウエプスターによると、「シーモア・

プレイスでのスイトウエル夫人のパーティー」に出かけた翌日の六月一二日に、バイロンはこの詩を制作した。「そこで彼は初めて、いとこの美しいウイルモット夫人に出会った。僕たちがアルバニーの彼の部屋へ戻ったとき、彼はほとんど何も言わず、フレッチャーバイロンの従僕に、ブランドーを大きめのグラスに入れてくれるようにと望んだ。そして、ウイルモット夫人の健康を願って、いっぺんに、彼はそれを飲み干したのだ。それから休むのだと引き下がったが、一晚中悲しい気持ちだった、と後で聞いた。」(レスリー・A・マーチャンド編(一九七五)『バイロンの手紙と手記』第四巻、ベルクナッププレス、一二四頁および注参照。)

バイロン文学にはよくあることだが、このウイルモット夫人が何者かということについて、混乱が見られる(たとえば、プロセロー・E・ロウランド編『バイロン卿の作品集、手紙と手記』第二巻(一八九八)、三三三頁とその注、マーチャンド、前掲書、第四巻二九〇頁とその注、E・H・コールリッジ編『バイロン卿の作品集、詩』第三巻(一八九九)、三八一頁、アシュトン版一三二頁の注などを参照のこと)。この

人物は作家のバルバリーナ・オウガー(一七六八—一八五四)、後のデイカ夫人(一八一九)ではなく、デービーシャーのユスイーピアス・ホートンの娘アン・ウイルモット(一七八四—一八七二)である。この女性は、バイロンのいとこにあたるロバート・ジョン・ウイルモット(一七八四—一八四二)と結婚した。この混同は、デイカ夫人の最初の夫が、ヴァレンタイン・ウイルモットだったことがもとで生じている(マルコム・エルウイン(一九六二)『バイロン卿の妻』ニューヨーク、三〇一、四二六、五二四頁参照)。スイトウエル夫人のパーティーで、バイロンがウイルモット夫人に出会ったとき、彼女は「ドレスに黒いスパンコールをつけた喪服で現れた」。それ以前には、王室の摂政周辺の仲間内で彼女を見かけた際に、「ウイルモット夫人は…白鳥で、より清らかな流れへと赴くのもしれない」と、バイロンは述べている(マーチャンド、前掲書、第三巻二二四頁にある一八二三年十一月二十二日付の手記参照)。ロウランド(前掲書、第二巻三三三頁注)も、マーチャンドも、この女性をバルバリーナ・オウガーと同一視しているが、この描写は、ロバート・ウイ

ルモット夫人であることを示唆している。この場合は、(前述した)ウエブスターによる言及、つまりバイロンが「初めて」スイトウエル夫人のパーティでいところに出会ったとする言及から、混乱が生じているように思われる。しかし、ウエブスターは誤っているのである(エルウィン、前掲書、一九三頁注参照)。

王なる伶人が豎琴をかき鳴らしたぞ

原稿について。日付のないバイロンの草稿(原稿A、大英図書館蔵)、原稿Aのチャールズ・ハンソンの複写原稿(原稿B、マレー社蔵)がある。原稿Bには、次のようなメモが付されている。「Ch. H. 「一八」一五年二月八日」N. B. 「すなわち原稿Aにあるように」最後の連がもともと訂正線で消されていた。」また、オーガスタ・リーの備忘録には、彼女の複写原稿が収められている(原稿AL、大英図書館蔵。右記参照)。この原稿には、四行目に興味深い変形が見られる。一八一五年ネイサン版を皮切りに、一八一五年マレー版、その後の出版物に収録された。一八一五年

ネイサン版では、この詩を四行詩に数え分けている。

一八一五年マレー版では、二行目、十六行目、二十行目の体裁がまちがっている。おそらく、一八一五年の早い段階で制作されたものの、最後の連は、バイロンがネイサンにこの詩の最初の形のものを渡した後、ある時期に付け加えられた(アイザック・ネイサン(一八二九)『バイロン卿のさまざま作品と思ひ出』、三十三頁)。アシュトンは、この詩は一八一四年後半に書かれた可能性があると考えている(二十三頁)。

一行目 ムーアの『アイルランド歌曲集』における「タラの王宮の広間でかつて響き渡った琴よ」を想起させる。

十二―十三行目 詩篇六十五章十三節と比較参照のこと。

十七―二十行目 『邪宗徒』一一三五―八行目と比較参照のこと。

もしも高きあの世が

原稿について。唯一の原稿は、オーガスタによる複写原稿(原稿A L、大英図書館蔵。右記参照)で、それはべつの原稿から複写されたにちがいない。一八一五年ネイサン版を皮切りに、一八一五年マレー版、その後の出版物に収録された。アシュトンは、この詩は一八一四年の末に書かれたにちがいないと指摘している(前掲書、二十三頁)。

一―四行目 黙示録七章一七節と比較参照のこと。

野の羚羊

原稿について。日付のないバイロンの草稿(原稿A、マレー社蔵)がある。一八一五年ネイサン版を皮切りに、一八一五年マレー版、その後の出版物に収録された。アシュトンは、一八一四年十一月から十二月という日付を入れている(前掲書、二十五頁)。

五行目 「アイアンシーへ」第四連と、『邪宗徒』四七三―四行目を比較参照のこと。

ああ、人々のために涙せよ

原稿は現存していない。一八一五年ネイサン版を皮切りに、一八一五年マレー版、その後の出版物に収録された。一八一四年九月の上旬に書かれ(アシュトン、前掲書、二十三頁)、おそらく、「ヘブライのうた」として、バイロンが特別に書いた、最初の一連の詩のひとつである。

六―八行目 哀歌五章十五節の影響が見られる。

十行目 詩篇五十五章六節の影響が見られる。

十一行目 マタイによる福音書八章二十節の影響が見られる。

ヨルダン川の岸边では

原稿について。日付のないバイロンの草稿(原稿A、大英図書館蔵)がある。一八一五年ネイサン版を皮切りに、一八一五年マレー版、その後の出版物に収録された。おそらく、一八一四年九月に制作された(アシュトン、前掲書、二十三頁)。

三行目 列王記上十九章十八節を比較参照のこと。

五行目 出エジプト記三十二章十五―十六節を比較参照のこと。

六一―七行目 出エジプト記三十四章二十九―三十五節を比較参照のこと。

八行目 出エジプト記三十三章二十節を比較参照のこと。

エフタの娘

原稿は現存していない。一八一五年ネイサン版を皮切りに、一八一五年マレー版、その後の出版物に収録された。おそらく、一八一四年十一月―十二月に制作された（アシュトン、前掲書、二二五頁）。この詩は、士師記十一章二十九―四十節に基づいている。

おお！ 花のさかりに死んだひとよ

原稿について。日付のないバイロンの草稿（原稿A、マレー社蔵）と、チャールズ・ハンソンによる原稿Aの複写原稿（原稿B、一八一五年二月八日の日付

あり、マレー社蔵）がある。また、のちにバイロンによって校正された清書原稿（原稿C、ボドリアン図書館―ラヴレイス蔵）がある。この原稿には、「結婚前にシーハムで受け取った」という、バイロン夫人によるメモが付されている。アシュトン（前掲書、二十三頁）によると、一八一四年の後半、八月から十月に書かれたものである。一八一五年ネイサン版を皮切りに、一八一五年四月二十三日付『イグザミナー』に本文が再掲され、一八一五年マレー版、その後の出版物に収録された。

この詩の主題について、バイロンは、「あのひとはもういない。たぶん、彼女が存在していたんだという唯一の証は、ときに僕があさかにも身をまかせてしまふ感情しかないんだ」と、ネイサンに言った。コーリリッジは、この詩がサーザ詩群のひとつであると示唆している。

四行目 バイロンの一八二一年二月二十七日付の日記を参照のこと（ロウランド、前掲書、第五卷二二〇頁）。

我が心は暗い

原稿は存在しない。一八一五年ネイサン版を皮切りに、一八一五年マレー版、その後の出版物に収録された。おそらく、この詩は一八一四年十一月から十二月に書かれた(アシュトン、前掲書、二十五頁)。

ネイサンによると、「狂人がどうしたらものを書けるのかを試す」ために、バイロンはこの詩を書いた。「熱心に筆を執っていたが、一瞬、獐猛で威厳ある雰囲気、虚空をじっと見つめたのだ。靈感が閃いたように、ひとことも消すことなく、先に述べた詩行を書きつけたのだ。『筆を持つ僕の頭がおかしいのなら、作曲するきみの頭もまちがいにうかしいぜ。』という意見を言いながら、彼はその詩を僕によこしたのだ。」(ネイサン、前掲書、三十七頁) バイロンによる本文は、サムエル記上十六章十四―二十三節に基づいている。

一行目 オシアン「オーイ・ナム・モール・ウール」(『オシアン詩集』一八〇三、第一卷二八五頁)を比較参照のこと。

一―六行目 オシアン「ケイラスの戦い」(前掲書、第二卷、九―十頁)を比較参照のこと。

わたしはおまえが泣くのを見たよ

日付のない、一八一四年の透かしの入っている、バイロンが校正した清書複写原稿(原稿A、テキサス大学ハリー・ランサム・センター蔵)がある。オーガスタは、現在は失われている原稿から、複写原稿を作成した(原稿AL、大英図書館蔵。右記参照)。

一八一五年ネイサン版を皮切りに、一八一五年マレー版、その後の出版物に収録された。アシュトンは、この詩の制作時期について、一八一三年末か一八一四年初頭、という、早い時期を推定している。アシュトンもコールリッジも、二行目の「青い目」ということばのために、大いにこの詩をフランシス・ウエダバーン・ウエプスター夫人と結びつけている。バイロンのソネット「ジェニヴラへ」と比較されたい。

一―四行目 ウィリアム・ジョーンズ卿の、「東の国々の詩に関する評論」(『作品集』第十卷、三三五頁)の影響が見られる。

おまえの生が終わり

原稿について。唯一の原稿は、「おまえの生が終わり」

(訳注。原文 The Days are done。作品の題名は The Days Are Done。y。あり、in と there の最初の文字が、大文字と小文字で異なる。)と題され

たオーガスタの複写原稿である(原稿A L、大英図書館蔵。右記参照)。一八一五年ネイサン版を皮切りに、一八一五年マレー版、その後の出版物に収録された。アシュトン⁵は、この詩の主題は、バイロンのいとこのピーター・パーカー⁶であり、この詩が一八一四年十月上旬に書かれたのだと、妥当な推定をしている(前掲書、二十三頁)。「準男爵ピーター・パーカーの死に寄せて」を参照のこと。

八行目 マタイによる福音書十六章二八節、ヨハネによる福音書八章五十二節を比較参照のこと。

いまがそのとき

原稿について。唯一残されている原稿は、「いまがそのとき」と題された、オーガスタ・リーによるものである(原稿A L、大英図書館蔵)。しかし、これらの詩行は、『パリシナ』の冒頭部分として出版された。

『パリシナ』の冒頭部分の原稿は、バイロン夫人による複写のものが残されている(『パリシナ』の注参照)。一八一五年ネイサン版を皮切りに、一八一五年マレー版、その後一八一九年までずっと、マレー版には収録された。この抒情詩は、早くも一八一三年には『パリシナ』の一部として書かれたのかもしれないが、おそらくそれよりも後の一八一四年に書かれたのであろう(アシュトン、前掲書、二十八―九頁、および注。さらに『パリシナ』への注解を参照のこと)。

最後の戦いのまえの、サウル王の歌

原稿について。「一八一五年シーハム」という日付のあるバイロンの最初の清書原稿がある(原稿A、ポドリアン図書館―ラヴレイス蔵)。バイロンの校正の入ったバイロン夫人の原稿もある(原稿B)。バイロン夫人の清書原稿(原稿C)、受付係の複写原稿(原稿D)がある。原稿B、C、Dはすべてマレー社蔵。一八一五年マレー版を皮切りに、その後の出版物に収録された。一八一五年二月上旬に書かれた(おそらく

一月下旬には書きはじめられた。

バイロンの本文は、サムエル記上二十八―三十一章、とくに三十一章に基づいている(バイロンが一般注記事項として、原稿Cからこの詩へと引用をしている)。サムエル記上三十一章は次のとおりである。

サウルに対する攻撃も激しくなり、射手たちがサウルを見つけ、サウルは彼らによって深手を負った。サウルは彼の武器を持つ従卒に命じた。「お前の剣を抜き、わたしを刺し殺してくれ。あの無割礼の者どもに襲われて刺し殺され、なぶりものにされたくない。」だが、従卒は非常に恐れ、そうすることができなかつたので、サウルは剣を取り、その上に倒れ伏した。(聖書の訳は一六〇八年版)

サウル王の悲劇的な人物像に関するバイロンの見解については、ネイサンの前掲書(二八二九)四十二―四十三頁を参照のこと。

七―八行目 ルーカーヌス『ファルサリア(内乱)』
第七卷三一〇―三十一行

十行目 ヨナタンのこと。(原稿Cにおける注参照。)

サウル王

原稿について。「一八一五年二月シーハム」という日付のあるバイロンの草稿がある(原稿A、ボドリアン図書館―ラヴレイス蔵)。原稿Aから起こしたバイロン夫人の清書原稿(原稿B)と、受付係の複写原稿(原稿C)がある。原稿B、Cはどちらもマレー社蔵。一八一五年二月上旬に書かれた。一八一五年マレー版を皮切りに、その後の出版物に収録された。

バイロンの本文は、サムエル記上二十八章七―二十節を基にしている。エン・ドルの魔術師にサウル王が出会う物語は、バイロンが気に入っている物語のひとつだった。

二十七―八行目 サムエル記上三十一章四節を比較参照のこと。

「すべては空しい、とコヘレトは言う」

原稿について。「一八一五年シーハム」という日付のあるバイロンの草稿(原稿A、ボドリアン図書館―ラヴレイス蔵)がある。また、バイロン夫人の清

書原稿（原稿B、マレー社蔵）もある。一八一五年マレー版を皮切りに、その後の出版物に収録された。一八一五年二月に書かれた。「おそらく、シーハムで制作された詩のうち、最後の作品群のひとつであろう」（アシュトン、前掲書、二七頁）。もちろん、バイロンによる本文は、コヘレトの言葉の冒頭にあたる章に基づいており、これはまたバイロンの気に入っている文章でもある。

五行目 おそらく、スコット『湖上の美人』二十四章十九節を思い起こさせる。

冷たさが苦悩する肉体を包むとき

原稿について。「一八一五年二月シーハム」という日付のあるバイロンの草稿（原稿A、ボドリアン図書館—ラヴレイス蔵）がある。また、バイロン夫人による原稿Aの複写原稿（原稿B、マレー社蔵）もある。一八一五年マレー版を皮切りに、その後の出版物に収録された。一八一五年二月に書かれた。E・サルミエントの「バイロン卿とフレイ・ルイス・デ・レオンの

類似」（『英語研究の批評』第四卷（一九五三）二六七—二七三頁）では、実際に借用であるかもしれない、興味深くも顕著な類似点が議論されている。

一—四行目 伝道の書十二章七節を比較参照のこと。

九行目 『コリントの包囲』四一七行前後を比較参照のこと。

十九行目 「ダンテの予言」第三卷第九行を比較参照のこと。

二十行目 「この日わが三十六年目を終える」を比較参照のこと。

二十六行目 『天と地』七一五行目を比較参照のこと。

ベルシヤツアルの幻視

原稿について。バイロンの校正が入ったバイロン夫人の清書原稿がある（原稿A、マレー社蔵）。一八一五年マレー版を皮切りに、その後の出版物に収録された。一八一五年二月にシーハムで書かれた（ア

シュトン、前掲書、二十六―七頁)。

バイロンの本文はダニエル書五章に基づいている。

五―八行目 列王記下十六章を比較参照のこと。

十六行目 『ドン・ジュアン』第三卷第六十五連、

第七卷第一三四連を比較参照のこと。

三十四行目 ベルシヤツアルのために「壁に書かれ

ている文字」を解き明かしたとき、ダニエルは「若者」ではなかった。

四十二―三 「ナポレオンへの頌歌」一〇九―十二

行目を比較参照のこと。

眠れぬ者の太陽よ！

原稿について。バイロンはまず、未完の詩「ハルモディア」の一部として、一八一四年九月八日に、これらの詩行を書いた(「ハルモディア」注参照)。バイロンの清書原稿(原稿B、ボドリアン図書館―ラヴレイス蔵)。バイロンによる別の清書原稿もある(原稿C、マレー社蔵)。バイロンは九月十九日以前に、ヘブライのうたのひとつとして、この詩を抜粋した。

一八一五年マレー版を皮切りに、その後の出版物に収録された。この詩が月や宵の明星について書かれているのかどうかを尋ねられたとき、バイロンははじめに

返事をしなかったのだと、ネイサンは綴っている(ネ

イサン、前掲書、八十一頁)が、原稿は、バイロンが

月を想起していたことを示している。詳細は「ハルモ

ディア」の注を参照のこと。

六行目 「[「ニューステッド・アビー」]三―四行目、

『邪宗徒』一〇一―三行目を比較参照のこと。

『邪宗徒』一〇一―三行目を比較参照のこと。

我が胸が、おまえが思うほどに不実ならば

原稿について。バイロンの清書原稿(原稿A、ボドリアン図書館―ラヴレイス蔵)、バイロン夫人の清書原稿(原稿B、マレー社蔵)がある。原稿Aには、「一八一五年シーハム」という日付がある。この詩は二月に書かれた。一八一五年マレー版を皮切りに、その後の出版物に収録された。

アシュトンが指摘しているように(前掲書、九十三頁)、この詩は「ローマ皇帝ティトゥスがエルサレム

を破壊した日に」と対をなす種類のものである。この詩の語り手は、ディアスポラ（ユダヤ人の離散）のユダヤ人である。

マリウムネを悼むヘロデの嘆き

原稿について。「一八一五年一月ハルナビー」という日付の入ったバイロンの草稿（原稿A）と、一八一五年一月十三日の日付のあるバイロンの清書原稿（原稿B）がある。原稿Aと原稿Bは、ともにボドリアン図書館―ラヴレイス蔵。バイロン夫人の清書原稿もある（原稿C、マレー社蔵）。一八一五年マレー版を皮切りに、その後の出版物に収録された。

この詩は、亡き妻マリウムネに対してヘロデによって語られる「狂気の歌」である。不倫のかどで、ヘロデが彼女を処刑した（紀元前三十年）。そのうち、彼女の殺害を悔やみ、ヘロデは一時的に狂気に陥った。マリウムネは、その高貴な性格、美貌、そして悲劇的な運命のために、文学や歴史において有名なのだが、とくにヴォルテールの劇作『マリウムネ』に由来する

物語を、バイロンはおそらくよく知っていたのだろう。また、バイロンの詩では、ヘロデが摂政王太子（後のジョージ四世）を彷彿とさせるような人物として描かれている。この詩の制作の状況については、ネイサン（前掲書）五十一頁を参照のこと。また、バイロンにとつてのヘロデに関しては、マーチャンド（前掲書）第二卷八十四頁を参照のこと。

ローマ皇帝ティトゥスがエルサレムを破壊した日に

原稿について。一八一五年の日付のあるバイロンの草稿（原稿A）と、「一八一五年一月十八日ハルナビー」という日付のあるバイロンの清書原稿（原稿B）がある。原稿Aと原稿Bは、ともにボドリアン図書館―ラヴレイス蔵。バイロンの校正が入れられたバイロン夫人による清書原稿（原稿C、マレー社）もある。一八一五年マレー版を皮切りに、その後の出版物に収録された。

エルサレムは西暦七十年に破壊された。

一―四行目 アシュトンは、トマス・ムーアの「悲しみながらエリンの最後の一瞥を私に見るのだけれども」(『アイルランド歌曲集』第二巻)の影響を考慮している。

バビロン川のほとりに、我らは座って泣いた
原稿について。バイロンの草稿(原稿A)と、バイロンの清書原稿(原稿B)があり、それらはボドリアン図書館―ラヴレイスの所蔵である。原稿Bには、「一八一五年一月十五日ハルナビー」という日付がある。バイロン夫人の清書原稿(原稿C、マレー社蔵)もあり、これにはバイロンからキナードに宛てた鉛筆書きのメモがついている(アシュトン、前掲書、一六四頁注参照)。このメモには、キナードに、この詩か別の「改作」である「うみの谷間に」のどちらかを選ぶように頼んでいる(マーチャンド、前掲書、第四卷二四九頁を参照のこと)。一八一五年マレー版を皮切りに、その後の出版物に収録された。
バイロンの本文は、詩編一三七章に基づいている。

センナケリブ王の破滅

原稿について。「一八一五年二月十九日シーハム」と日付の入れられたバイロンの草稿がある(原稿A、ボドリアン図書館―ラヴレイス蔵)。バイロンの校正の入ったバイロン夫人の清書原稿もある(原稿B、マレー社蔵)。一八一五年マレー版を皮切りに、その後の出版物に収録された。バイロンの本文は、列王記下十九章とイザヤ書三十七章に基づいている。バイロンはおそらく自分の詩のなかで、ボナパルトとの対比をしようとしている(アシュトン、前掲書、八十頁注)。
一八二〇年九月七日の、バイロンのマレー宛書簡(口ウランド、前掲書、第五卷七十二頁)も参照のこと。

ヨブ記より

原稿について。「ヨルダン川の岸边では」の書かれた紙の裏面に、バイロンの手による草稿がある(原稿A、大英図書館蔵)。バイロン夫人の複写原稿もある(原稿B、マレー社蔵)。バイロンの手による、別の、おそらく最初の草稿も存在する(原稿C、レニン

グラードサンクトペテルブルク、科学アカデミーロシア文学研究所蔵)。『文学遺産』五十八号(一九五二)九八二―四頁)にファクシミリ版で印刷されている。一八一五年マレー版を皮切りに、その後の出版物に収録された。『亡き羊飼いのヘンリー・サビルの詩的遺稿』(一八三五)五十三頁には、この詩とは少し異なる本文が掲載されている。おそらく、一八一四年十月に書かれた(マーチャンド、前掲書、第四卷二二〇頁参照)。また、ネイサン(前掲書)の七十三頁も参照のこと。バイロンの本文は、ヨブ記四章十三―二十一節に基づいている。

訳注

本稿の作成にあたっては、小川和夫と齋藤正二による訳書を中心に参照した。ただし、先行する翻訳を見つけられなかった作品については、聖書の記述との整合性を重視し、全体としては若者に読みやすい口語訳を心がけた。語法・解釈上の問題点等については、紙面を改めて議論したい。

(1) ダビデ 賢く姿形の良い羊飼いの少年だったが、勇敢で音楽にも長けていた。のちのイスラエル王。

(2) ユダヤ パレスチナの古代王国(笠原、二九三)。

(3) レバノン 西アジアの地中海東岸にある、山脈や高地の多い地域。古代においては、良質の木材でもあった杉の木が生い茂っていた(現在は保護対象であるほどに少なくなっている)。

(4) エルサレム 原文では「*Salem*」。「カナンの古代都市」(笠原、二九四)。

(5) バビロン ユーフラテス河畔にあった古代都市。

(6) バビロンの流れのほとりて涙する 詩編一三七章に基づいている(小川和夫、二〇二)。

(7) シオン エルサレム南東部の丘の名。ダビデ王が祭壇を築いて以来、聖なる山となった。

(8) ヨルダン川 現在のシリア・レバノン国境のヘルモン山を水源とし、ガリラヤ湖を経て死海に注ぐ川。

(9) バール神 古代シリア・フェニキア地方などで崇拜されていた農耕豊穡神、男神。ユダヤのヤハウエ神信仰と対立し、預言者エリヤらによって排撃された。

(10) シナイ山 旧約の偉人モーセとその神とのかわりがあり

る聖なる山。

(11) エフタの娘 エフタは、古代イスラエルの英雄、士師のひとり。アンモン人との戦いで勝利を願ひ、神に誓約を立てた結果、戦いでは勝利を得た。その後、誓約を守り、大切な娘を、供犠として神にささげた。

(12) サウル王 イスラエル初代国王。預言者サムエルによって王位に就くが、のちに彼と不和に陥り、ペリシテ人との戦いで亡くなる。

(13) ガト 南部パレスチナの古代都市。ペリシテ人の持つ都市のひとつ。サウル王はこの近くで戦死した。

(14) 預言者サムエル イスラエルの士師、預言者。ペリシテ人から民族を救ひ、サウルをイスラエル初代の王に就けるが、のちにサウルとは不和に陥り、ダビデを次の王にした。

(15) コヘレト 「集会を招集する者」、あるいは「集会の中で語る者」を意味する単語で、伝統的には「伝道者」と訳されることが多い(新共同訳、(付) 八一九)。

(16) ベルシャツアル ベルシャザルとも表記する。新バビロニア王国の最後の王。ネブカドネザル王の子。千人を招いた酒宴の席で、その運命を示す文字が壁に現れた。

(17) カルデア 古代バビロニア南部。天文・暦法にすぐれ、

カルデア人は、ギリシアの人々にとつて、占星術師の代名詞ともなった。バイロンは『貴公子ハロルドの巡礼』第三編でもカルデア人に言及している。

(18) 若い異邦人 預言者ダニエルのこと。

(19) メディア 現在のイラン西北部を支配下におさめていた古代王国。ペルシア帝国に併合された。

(20) ペルシア アケメネス朝ペルシア。新バビロニア王国を征服する。

(21) ガリラヤ 古代パレスチナ北部の地域。

(22) マリアムネ ヘロデ王の妻。ヘロデ王が滅ぼしたハスモン家の出身。美貌をうたわれたが、叔父との不義を疑われ、ヘロデによつて、二人の子どもとともに処刑された。

(23) ヘロデ ヘロデ大王とも呼ばれる。ローマとの強固な関係を背景に力をつけたアラブ人で、ユダヤの王。その王位を正当化するため、ヘロデ自身が滅ぼした、ユダヤの旧政権であるハスモン家の血を引くマリアムネと結婚した。

(24) ローマ皇帝ティトゥス 父が帝位にある際、ユダヤ戦争最高司令官となり、エルサレムを陥落させ、町を破壊した。

(25) センナケリブ アッシリア帝国の王。大軍を率いてエルサレムに進軍、エルサレムの町を陥落させようとするが、

エルサレムとその周辺だけは攻略できなかった。

(26) アッシリア 西アジア、チグリス川上流アッシュュールを中心とする地域の古称。カルデア・メディアア連合軍によって滅びた。

(27) ガリラヤ湖 現在のイスラエル北部の湖。ヨルダン川中流に位置する。湖面が海面下二〇九メートル、最大水深約四十三メートル。

(28) アッシュュールの街 アッシリア帝国の発祥地、その都。

(29) 底本の編者マガンによる解説。

訳者解説

ここに訳出した『ヘブライのうた』(Hebrew Melodies)は、バイロンによって、一八一四年末から一八一五年夏にかけて執筆された作品である。出版の経緯については、「解説」のなかでマガンが述べているので、そちらを参照されたい。ただ、すこし付け加えておくと、バイロンがこの作品を執筆したころ、イギリスでは、スコットランドやアイ

ランドなど、その土地のことばで書かれた詩に曲をつけた作品が相次いで出版され、古くからのことばや旋律を受け継いでいくという意識が高まっていた。これらは「民族のうた」(national melodies)と呼ばれる。バイロンも、スコットランドの音楽に付ける詩を依頼されたものの、先行する作品を超えることは難しいと判断し、この依頼を断っている。一八一三年にはネイサンがユダヤ民族の「民族のうた」の出版を思い立ち、それを実現しようと考えていた。一方、バイロンは旧約聖書の歴史に大いに興味関心があった。旧約聖書を主題とする作品の依頼だったからこそ、バイロンはネイサンの依頼を承諾したのである。

『ヘブライのうた』は、最初にネイサンの手によって、楽譜付きで出版されたのだが、マガンの「解説」にもあるように、その後の経緯は複雑である。それぞれの版において、どの作品が掲載されているかはアシュトンの著書に詳しく書かれているので、そちらを参照されたい。結論だけ述べておくと、一九〇〇年にマレー社から刊行された『バイロン作品集 詩作編』全七巻のうちの第三巻に掲載された二十八の作品が、いわゆる「ヘブライのうた」とされるものであり、これで全部が出そろったと見ていいだろう。し

かし、どの作品を『ヘブライのうた』と位置付けて含めるかは編者の判断に委ねられるところが大きい。そのため、それぞれの作品集によって、ふくめられているものがまちまちになっっているのも否めない。日本バイロン協会の諸先生方によって、非公式ではあるが、バイロン研究の底本として推薦されているのが、この度訳出を試みたマガンによる全集であるため、この度の試みも、この全集を底本とした。

日本における『ヘブライのうた』の翻訳については、たしかに「ヘブライのうた」を章に立てた書物はあるが、そのほとんどは断片的である。二十四作品を収録した一八一五年マレー版を基準とすると、斎藤正二訳に収められている十七作品が最大と断言していい。また、「ヘブライのうた」という章を立てているものも少なく、バイロン詩集のほとんどが「抒情詩」というおまかなくくりのなかに、いくつかの作品を選んで訳出掲載している。また、これら邦訳で扱われる作品はほぼ同じであり、『ヘブライのうた』のなかでも、旧約聖書と関係のないものの作品群に分類されるものが多い(たとえば、「わたしはおまえが泣くのを見たよ」や「おお！ 花のさかりに死んだひとよ」など)。旧約聖書のテーマだからこそ成立した『ヘブライのうた』だ

ということを踏まえると、たとえば「サウル王」や「センナケリブ王の破滅」のような、いわゆる歴史的なテーマを扱ったものもつと訳されていいはずなのである。邦訳についての詳細な分析は今後の研究課題とし、紙面を改めたいと思う。ただ、これらのことを考慮すると、今回ここに『ヘブライのうた』をひとまとまりとしての訳を試み、ひとつの里程碑とすることには意義があると思われるのだ。

【底本】

Byron, George Gordon. *The Complete Poetical Works*. Ed. Jerome J. McGann. Vol.3. Oxford: Clarendon Pr., 1981. pp.288-311, 465-

472.

【参考文献】

※ここには、訳出にあたって主に利用したものと、「訳者解題」の執筆に参照したもののみを記載する。

Byron, George Gordon. *Byron's Letters and Journals*. Ed. Marchand-Leslie A. Vols.2, 4-5. Harvard Univ. Pr., 1973. 75-76.

Ashton, Thomas. *Byron's Hebrew Melodies*. Routledge & Kegan Paul Pub., 1972.

及川和夫『アイルランド詩とナショナル・アイデンティティ
The Harp & Green』音羽書房鶴見書店、二〇一八。

小川和夫『バイロン詩集』白風社、一九七五。

笠原順路『対訳バイロン詩集——イギリス詩人選（8）』岩波
書店、二〇〇九。

斎藤正二『世界の詩集4 バイロン詩集』角川書店、一九六七。

新共同訳『バイブル・プラス 聖書』日本聖書協会、二〇〇九。

東中稜代「バイロンの *Hebrew Melodies* における ‘ambivalent’
について」、『龍谷大学仏教文化研究所紀要』（22）、
一九八三、一一四—一二八頁。